



# 日本 ハンザキ研究所ニュース 2010(7) : 通巻 No. 55

発行2010年7月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

ハンザキ研をめぐるスター⑱

## われこそが“元祖目玉親父”じゃ！？・・・エリマキツチグリ

ハンザキ研の横を流れる市川の土手の草むらから“目玉親父！”がこちらを見上げていた。目玉だけしか見えていなかったのが驚いたが、草を掻き分けてみるとキノコだった。キノコ観察会の横山了爾先生から“エリマキツチグリ”であると種名を教えていただいた。ツチグリの名前が付いたキノコの仲間はいくつもあるが、“襟巻”を付けているのでこの名があるそうだ。仲間は日本で13種ほどが知られており、“土柿”や“土栗”などその姿からの呼び名があるが、英語では“earth star”と呼ばれ、地球の星・・・となる。外側に広がる外皮と呼ばれる部分は湿度に応じて開閉し、“瞳”の部分からは孢子が飛散するという。



目玉親父のエリマキツチグリ

このキノコの標本はホルマリン漬けにしてあり、まもなく3年になろうとしているが健在である。横山先生はキノコは乾燥標本にするものだと言われるが、私は何でもかんでも液漬標本にしてしまう。魚の標本作りの習慣が影響しているのかもしれない。それでもこの標本ビンを手で「これが目玉親父だ」と言って子供たちに見せると、みんな目を輝かせている。子供たちだけではなく大人も同様だ。今、テレビでは“ゲゲゲの女房”が放映されているそうであるが、皆に大もてのキノコである。ところで水木しげるさんは何をモデルに“目玉親父”を世に送り出したのだろうか？ 私は勝手に「きっと水木さんもこのキノコから発想が浮かんだに違いない」と断言しているものの、本当のことが知りたくもある。どなたかご存知ありませんでしょうか？



写真1 アンコ淵にセットしたフィルターユニット



写真2 日本工科専門学校生の水中土木実習



写真3 “リバーモンスター” ロケ風景



写真4 アユのつかみ取りイベント



写真5 ハイイロオニタケ



写真6 ハンザキ観察会

## 魯山人と山椒魚

会員 加賀見 省一 (但馬国府・国分寺館長)

先日“ハンザキ研ニュース”No.45で栃本先生が魯山人の食べたとされる山椒魚のことを書いておられるのを拝見しました。手元に関連する資料がありましたので、できるだけ謎を検証？してみたいと思います。

魯山人が山椒魚を食べたことを書いたのは、「星岡茶寮（ほしおかさりょう）」が発刊した機関紙「星岡」57号（1935年6月刊）に掲載された「山椒魚」が初見です。その後、「星岡」掲載の文章を中心にして編集された「春夏秋冬料理王国」（淡交新社 1960）、その復刻版である「魯山人の料理王国」（文化出版社 1980）などにも掲載されています。“山椒魚”の部分を読んでみると、魯山人は4回食べていることが分かります。そして初回が、栃本先生の大先輩で水産講習所長であったI氏の贈ったものです。このときの山椒魚は、2尺くらいのものだったと書かれていますので、オオサンショウウオであったことは間違いありません。

食べた時間と場所ですが、水産講習所は当時の農商務省が1897年（明治30）に設置したものですから、それ以降のことになります。魯山人は文中で、震災前にI氏が贈ってくれたと書いていますから関東大震災のあった1923年（大正12）9月以前です。恐らく1920年（大正9）に東京・京橋に古美術骨董の店“大雅堂芸術店”を創業した直後から、翌年に大雅堂の2階で会員制の“美食倶楽部”を組織し、自ら作った料理を出した頃ではないでしょうか。山椒魚の料理中に、「山椒の芳香は厨房からまたたく間に家中に広がり」とあることからこの場所の可能性が高いと思います。

ところでI氏が魯山人に贈った山椒魚がどこで捕獲されたものかは不明です。しかし、他の3回については大雑把に産地が書かれています。2回目は「日本橋の山城屋に山陰かどこか、ともかくあの辺のものが3匹手に入ったと言う情報を耳にしたので、さっそくその内の1匹を買い受け…」とあります。3回目は、鎌倉の自宅（1927年以降）で食べたと書かれ、「これは出雲の人から贈られたものだが、なんでも山口県の山中で捕れたもの」とあります。最後は「松江の知人の家を訪ねたとき、山椒魚が偶然3匹ばかり手に入り、大いに旨く食べた…」とあります。最後の例は松江で食べているので別ですが、中国山地のものが東京に運ばれていたことは間違いなさそうです。

文化財保護法違反かどうかについては“星岡”57号が1935年（昭和10年）の発行ですので、後の出版物に魯山人が加筆し掲載されていても、指定前のことになります。話は違いますが、魯山人は最高級料亭“星岡茶寮”を東京・赤坂で開きます。そこで会員に鮎を提供するため、一番旨いと思った丹後・和知川の鮎をトラックと貨物列車に生簀を積み込んで、水を絶えず注がせながら生きてまま運ばせたことがあります。魯山人が直接運んだことはないでしょうが、同様にして運ばせたと断言はできないものの、全くありえないことではないような気がします。

## 7月の観察会

### ① キノコ

17日に実施された。講師は昨年同様に横山了爾・宇那木隆両先生である。昨年は10月のマツタケ・シーズンに開催されたのだが、アカマツはあるものの、マツタケの不作年とかで見つからなかった。参加者の中には必死になってアカマツの周辺を探し回って、キノコの観察よりもマツタケ探しに夢中な方もあったようだ。今回は時期を変えての観察会で、ハンザキ研周辺におけるシーズンごとのキノコ出現種を網羅していこうということになり、同じ場所で実施した。季節を変えて行えば年間を通じて出現する種の一覧表が作成できるので貴重な資料になるだろう。前回は40種ほどであったが、今回は30種と、種数は減ったが面白いキノコが見つかった。これまでに、ハンザキ研周辺のキノコは観察会での60種ほどと、私が普段から気をつけて周辺からサンプリングしているものを含めると80種は越すことになる。

今回の観察会でのピカーの大物はハイイロオニタケであった。聞くだけで恐ろしげな名前だが、その姿は正に“鬼の鉄アレイ”そのものというものだった。整理する暇も無く、翌日に標本にしようとしたら、何者かがかじっていた。ホルマリンの原液をかけたので、今の所はかろうじて姿を保っているが、来年の観察会までにはどんな姿になっているのだろうか？ 鳥類も小型哺乳類も昆虫も全て液漬標本にしている。

### ② ハンザキ

31日に実施した。講師は岡田純博士である。参加者は遠方の愛知県から岡山県に渡る40名もの数になった。夜行性の強いハンザキの観察は、動物の生態に合わせて夜間にやるしかない。19時～21時と言う不利な時間帯だが、遠方の方は近くの民宿に宿を取っての挑戦である。夕食は事前の申し込みが多かった人気の“アマゴ井”を出前してもらった。近くの黒川養魚場の考案による“安くて旨い井”だ。このような、他に無いユニークなものを考えていくことは重要だ。ハンザキ研にやってくる昼食時の見学者には、このアマゴ井かアマゴうどん、鹿カツ定食を勧めている。害獣のシカも駆除して重油で燃やすのでは可哀想だ。せめて旨く食ってやるのが人の努めではないだろうか？

明るい内にオオサンショウウオ保護センターでおとなしくしているハンザキを見てから、映像を使ってハンザキの生態を学んでもらう。そして、暗くなったプールで活発に動きまわるハンザキに驚きと感動を覚え、足場の良い河川へ移動する。そこでは野生のハンザキを観察し、測定やマイクロチップの挿入などを見学する。全てチェックが済んだら希望者に原状復帰（放流）してもらおう。暗闇の中を水中に放されて、悠々と闇に消えていくハンザキをみていると、神経の図太さを感じさせられる。そして、物事に動じずに3千万年前から姿形をほとんど変えることなく今に生きているこの貴重な特別天然記念物をどうしたら守ってやることができるのかとか考えてしまう。ほっといてくれと言われているような気が払拭できない。悩ましき状況だ。人のエゴなのだろう。

## フィルター・ユニット

また新しい河川工事材が手に入った！ と言っても、私が知らなかっただけで既にあちこちの現場に使用されているようだ。豊岡市の出石川では堰として使われていたし、真庭市湯原町の旭川支流では河床を保護するのに使っていたのを見た。簡単に言えば、合成繊維で作られたネット状の物に河原の石を入れて包んでしまうものである。大きさは1トから8トまであり、流れの強さに応じて使い分けたり連結して流されないようにもできる。

コンクリートメーカーの「共和コンクリート」からこんなものがあるが使えないかと言う相談があった。面白そうだったのでサンプルとして2ト型のを1点送ってもらった。私が非常勤講師をしている姫路の日本工科専門学校の元気な学生さんがタイミングよく学外実習に来ることになっていたので、実践してもらった。黒主が頑張っていたアンコ淵の巣は今年もゲリラ豪雨のために土砂が堆積して出入り口を塞いでいる。ここに砂礫が流れ込まないようにこのユニットを設置し、大きな石も並べて流れをそらすことにした。少々石を入れすぎて口が絞りきれれていないが、どっしりと納まっている。その最大の利点は繊維であるために川底の形状にピッタリとフィットすることである。

従来の工事では“蛇籠”とか“布団籠”と呼ばれていた金網でくるむと言うより、細長い籠や布団状の籠に石を詰めたものが使用されていた。その昔には金網ではなく、竹で編んだ籠であったのだが、長持ちしないので金網になったようだ。金網製のものでは、直線的なので川底の凹みや出っ張りにフィットしにくく隙間ができやすい。隙間があると流れによってひっくり返されてしまうことがある。ある川で大きな岩があるなどと思ってよく見るとフトン籠が丸められていたのだった。大きな石が流されてきて当たると石と石に挟まれて繊維が切れてしまう心配も考えられるが、これも一部が切れて伝染的にほつれることが無いような編み方がされており、金網のものと同じくらいの耐久性があるそうである。

また、子供たちが川遊び中に針金で傷つく心配も無くなり、流れ着いた落ち葉などでカバーされてくると自然状態に近い景観になってくる。素人が一人の手作業でやるには1ト型の物が扱いやすいので、これを入手してアンコ淵のハンザキの巣穴を守ることができないかとトライしているところだ。また、朝来市河川ステーションに設置した“はんざきブロック”も、下流の堰がほぼ破壊されてしまったので、河床が低下して干上がりそうになっている。そこで下流に石を積んで水位を上げているが、大水で流されてしまう。ここにもフィルター・ユニットを設置して堰上げをしてみたいと考えている。

昔の人は、石を積んで川の流れをせき止めては水田に水を入れていた。少しの大水でも流されては再々積みなおしの重労働があった。そこへコンクリートの登場である。流れを完璧に遮って取水できる効率の良い堰が出現した。その代わり、河川内の生き物達にとっては難関の厄介者が多数現れて、一度下流に流されると元の住処に戻れなくなってしまった。今、政治の世界では“コンクリートから人”と叫ばれているが、河川工事においても、もっともっと生き物に優しい工夫がほしいものだと思う。

ハンザキ研日誌

2010年7月

- 1日 市川のアユ釣り解禁、名人から初物をいただく
- 3日 NPO事務局会議、6名
- 4日 構内でよく太ったマムシをサンプリング、子供たちへの教材だ
- 5日 兵庫県豊岡土木事務所など3名来所、出石川の追跡調査などについて
- 6日 大阪府安威川ダム建設環境委員会
- 7日 共和コンクリートよりフィルター・ユニット2<sup>ト</sup>型1点受贈
- 9日 ハンザキ定期健康診断(岡田純博士、アメリカからの留学生2名などと)
- 10日 T-2見学会“黒川・裏路地探検”20名にレクチャー
- 11日 ハンザキ研ニュースNo.52・53刊行
- 13日 FMゲンキ“百人の哲学”収録、姫路市納屋工房にて(24日放送)
- 14日 600ℓ水槽用の濾過槽入荷
- 16日 アニマル・プラネット(BBCなどへ配信)“リバー・モンスター”取材
- 17日 ・日本工科専門学校生の学外実習で水中土木作業(アンコ淵の砂止め)  
・岡山県勝田町の“あんこう祭り”出展  
・梅雨明け
- 18日 ・神戸市立須磨海浜水族園にて“アユのつかみ取り”イベント(黒川キッズラボ実行委員会)  
・見学者8組22人
- 21日 “やまびこの郷”の児童6名、職員5名見学に
- 22日 上水用のポンプ取替え工事(13万円)
- 24日 キノコ観察会、横山・宇那木両講師と参加者10名、スタッフ7名で、約30種
- 28日 NTTドコモより3名、携帯電話のアンテナ設置について下見に
- 29日 兵庫県養父土木事務所より2名、ポンプピットの排砂について
- 30日 兵庫県文化財保護審議会、県公館にて
- 31日 ・オオサンショウウオの夜間観察会、岡田純講師、参加者40名(愛知県~岡山県)  
・応募者が予定数に達せず、キッズラボ中止となる

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

夏休みに入り、梅雨があけた途端に猛烈な暑さだ。暑さは下界と変わらないが湿度が低く快適に過ごせる。夜明けなどは寒いくらいの外気が入ってくるので、クーラーなしの生活はすばらしい。高血圧の診断を受けて2年ぶりに内科を訪れた。1か月は下山できそうもないと、大量の丸薬を頂いてきた。血圧を測りながら電話で経過を連絡するようにとのことだった。気のせいaka頭部に血が上ることが少なくなったように思う。頭がボアアツとするのが高血圧の症状かどうかは知らないが、ビールを飲むと血圧は下がるのだが・・・

(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)